

親の養育態度が現在の愛着関係に及ぼす影響

— メンタライゼーション機能に着目しての検討 —

岡 本 雪 子

問題・目的

メンタライゼーションとは本邦において、ある行動の背後にある精神状態に注意を向け、それを認識することと定義されている（上地，2018）。メンタライゼーションを含めて親の養育態度が現在の愛着スタイルにどのような影響を与えているのかを検証した実証研究はごく少数の報告に留まっている。よって本研究では、過去の親の養育態度が大学生の現在の愛着スタイルを媒介してメンタライゼーション機能にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とする。

方 法

大学生306名を対象とした質問紙調査を実施した。感情のメンタライゼーション能力の測定には「MA日本語版（高須，2019）」、現在の愛着関係の測定は「ECR-GO日本語版（中尾・加藤，2004）」、親の養育態度の測定には「PBI日本語版（北村・鈴木，1993）」を使用した。

結果・考察

島（2014）の結果を参考に、過去の両親それぞれからの「受容」から「親密性の回避」、過去の両親それぞれからの「過保護」から「見捨てられ不安」、愛着スタイル（見捨てられ不安および親密性の回避）からメンタライゼーション能力（感情の理解、感情の調節、感情の表出不全）に影響を与えるというモデルを設定して共分散構造分析を行った。

分析の結果、両親それぞれからの「過保護」は「見捨てられ不安」を高め、母親からの「受容」が「親密性の回避」を低めることが明らかとなった。また、「見捨てられ不安」が高いと「感情の理解」及び「感情の表出不全」を高め、「感情の調節」を抑制することが明らかとなった。一方で、「親密性の回避」が高いと、「感情の表出不全」が高まり、「感情の調節」を抑制することが明らかとなった。この結果から、両親それぞれからの「過保護」が「見捨てられ不安」を経由して、「感情の理解」「感情の調節」「感情の表出不全」、全てのメンタライゼーション機能に影響を及ぼしていることが明らかとなった。なお、適合度指標についてはおおむね良好な結果が得られ、過去の養育態度が愛着スタイルを媒介してメンタライゼーション能力に影響を及ぼすという仮説モデルの妥当性が示された。

これらの結果から、過去の両親の養育態度は親と子の関係をを超えて積極的に他者と関わることの困難さや強い不安へとつながると考えられる。したがって、不適切な養育態度は不安定な愛着を形成し、その結果メンタライゼーション能力を低下させる可能性が示唆された。